

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2014年7月

博士位申請論文審査報告書

論文題目：日本語教師性を構築する制度と日本語教育
—教師主体の日本語教育の構想に向けて—

申請者氏名：牛窪 隆太

主査 宮崎 里司 (大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 川上 郁雄 (大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 池上摩希子 (大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

本研究は、「日本語教師の拘束性に着目し、教師としてのあり方を「日本語教師性」として批判的に検討するとともに、新たな役割を構想するための教師の主体性のあり方を示すこと」を目的とした論考である。その上で、研究課題として、以下の4つを掲げている。

- I. 日本語教師にとって拘束性に力が与えられ、再生産される理由ならびに日本語教師の主体性への考察。
- II. 日本語教師は、自身に対してどのような教師像を求め、同時にどのような問題を抱えているのか。
- III. 現場の教師は、どのような制約の中で教育実践を行い、そこでの教師の主体性とは何か。
- IV. 日本語教師が、他の教師との関係性の中で、変容させていく上での必要条件とは何か。

以上の課題を検証した各章の概要を、以下に記述する。

まず、第1章の「問題の所在と研究の目的」では、本研究において日本語教師の主体性を考えるにあたり、教師が自らに対して求めてきた、「日本語教師性」を問題化しなければならない理由について考察している。具体的には、教師としての現場経験から、日本語教育において、つながれない日本語教師のあり方を問題視する必要があること、教師の関係性に関し、日本語教育で主張される連繫（アーティキュレーション）をめぐる議論、さらに、教師の交渉や葛藤における主体性について、先行研究では、制度の制約や拘束性に関する議論が希薄であるといった指摘を含めた点に言及している。

続く第2章の「日本語教師性を構築する制度と主体」では、日本語教師にとっての拘束のあり方について理論的考察を試みている。まず、研究課題Iに関しては、2章において制度論、主体論における拘束性の議論を参照しながら、日本語教師にとっての拘束性とそこに生まれる主体性の意味について理論的に考察した。また、教師と学生の間には「暗黙の約束事」や「対応規則」に基づく、強固な役割関係の固定化が存在することを指摘した。先行研究では日本語教師は役割規範の中で葛藤を抱くと説明されるにとどまっており、十分に論証されてこなかった点である。そして、その解決

のためには、教師の主体性について、求められるあり方に「応じる主体性」ではなく、「逸脱する（ないしは、ずらす）主体性」にシフトする意義を主張するとともに、ブルデューらの再生産論における「共犯性」の中で捉える必要性を指摘した。具体的には、日本語教師として自身もつ言語観や言語教育観は、制度的他者である他の日本語教師との関係性（絶えざる応答）の中で変容させていくことで、日本語教師としての「職業的良心」そのものを変容させる必要性を説いた。

また、第3章の「日本語教師性を構築する「語彙」の研究」では、日本語教育内部において、教師が自身に対して求めてきたあり方（「日本語教師性」）を明らかにするために、日本語教育研究において教育実践を記述する際に用いられた、教授法の転換と学習者の多様化という二つの転機から生まれた、「主体（性・的）」と「ニーズ」という「語彙」の研究を行なった。こうした研究は、自身の主体性を問題視せず、言語教育観を語らないまま、「外在化」された目的に「応じる」日本語教師として自身の存在意義を主張してきた傾向があるという指摘は、2章の「求められるあり方に「応じる主体性」ではなく、「逸脱する主体性」という主張とも相通じるところがある。それを基に、申請者は、「日本語教師の主体性とはあらかじめ、服従化に向かうことが方向づけられているものである」と主張している。

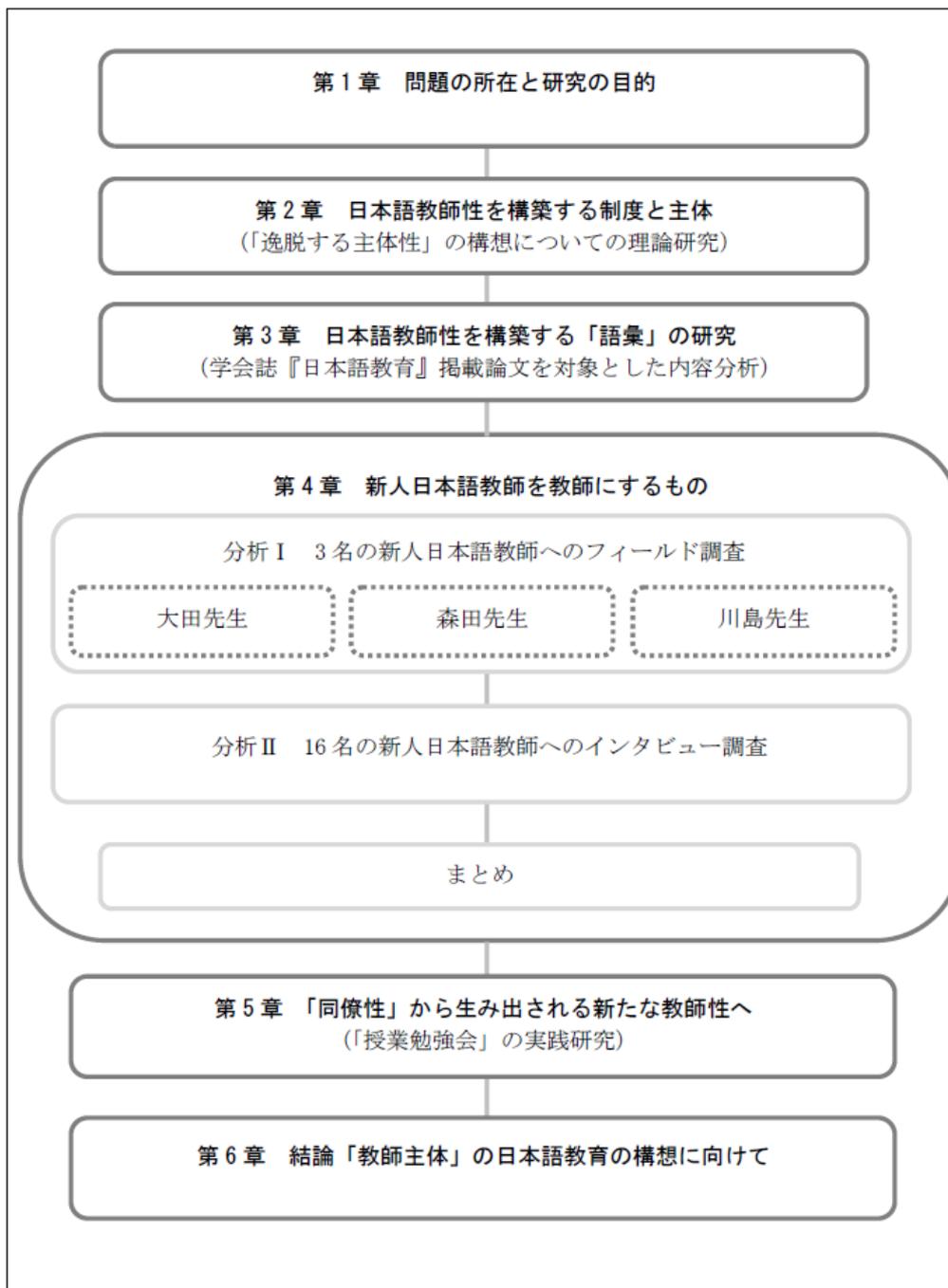
「新人教師を日本語教師にするもの」と題した4章においては、3名の新人日本語教師を対象に行なったフィールド調査と、16名を対象に実施したインタビュー調査から得られたデータについて、ナラティブアプローチとM-GTAを援用して分析した。その結果、日本語教師性の問題を、「個体主義性と同調性」、「教師間の経験主義的關係」「言語教育観の喪失と教授技術の本質化」としてまとめ、「応じる主体性」に基づく「日本語教師性」の枠組みで、日本語教育が維持される構造があることが証左された。その上で、①「こなしていけば終わるシステム」が存在するとする現場状況、②道具としての日本語を教える教授技術のニーズ、③「必要とする日本語を教える」という役割意識によって「逸脱する主体性」への観点の希薄化を指摘し、それによる拘束性を同僚教師との関係性において克服していく必要性を主張している。

5章の「同僚性」から生み出される新たな日本語教師性へ」では、企画した授業勉強会（「読み会」）で得られた実践研究の中で、日本語教師が同僚教師との交渉において、「共犯的」に「逸脱する主体性」を見出す可能性を検討した。同時に、その見出す過程において教師間で共有される「共犯性による連帯の感覚」こそが「同僚性」であ

るとした。

そして、最終章となる6章「結論 「教師主体」の日本語教育の構想に向けて」では、本研究のまとめとともに、「目の前の学生に必要な日本語を教える」日本語教育の問題点について批判的に考察し、新たな教師性を構想するための方向性について議論した。

本論文の構成をチャートで示すと、以下のようになる。



以上のように、本論文は、日本語教師が日本語教師になる過程はこれまで十分に研究対象化されなかったため、日本語教師が教師になっていくということを「日本語教師性」と捉え、問題化した点で高く評価できる。さらに、日本語教師同士の連携を通じて、日本語教師としての主体性を新たに編み出すことによって、新たな日本語教師性を獲得できるという道筋を明らかにした点や、教師の成長プロセスを明らかにし、応じるだけではなく、逸脱する主体性を育む意義についての再検討を提唱する筆者の考え方は正鵠を得ていると言える。加えて、研究方法論の観点から、新人日本語教師に関するフィールド調査、およびインタビュー調査から得られたデータについて、ナラティブアプローチと M-GTA から分析した手法に関し、独創性を探ろうと試みた点なども注目される。その上で、結論部に、「言語教育観」とは、「言語」の「教育観」という従来の捉え方ではなく、「言語教育」の「観方（パースペクティブ）」としての「言語教育観」と主張する申請者の捉え方は、教師の「言語観」を大きく揺さぶり、変容させる可能性を秘めた独創的な提唱ではないかと考える。こうした主張については、本研究の問題所在の根幹に関わる部分であり、真摯な考察が重ねられていると判断できる。

一方で、今後の課題とすべき点もいくつか確認された。新人教師とベテラン教師が、相互の教師性の成長に寄与する真の同僚になりえない堅固な教師共同体の構造的欠陥、かつ新人教師の主体性を磨き上げる上で、ベテラン側からの、スキヤフオールディング (scaffolding) やフェーディング (fading) といった支援の働きかけが行われず、暗黙知で学び取らせようとする伝統的な徒弟制や、正統的周辺参加論からの考察が不足していると思われるため、さらなる精緻な考察がなされるべきであろう。そういった意味では、日本語教師間の「交渉可能性」が閉じられることの問題点について新たに言及したとされる 4 章において、今後の研究の課題も見いだされた。また、公開審査発表会においても、逸脱する主体性をめざした同僚性を高めるための方策に関する問いに、教師同士の語り合いが重要だとしたが、具体的な提案は、今後の研究の進展に委ねられている。6 章の結論部で提唱されている「教師主体」の日本語教育の構想に関する、最終的に日本語教師がどのような社会を構想するのか、という課題に向けて、より具体的な作業検証が必要であると思われる。

加えて、本研究で議論の射程となっているのは、国内の教育機関でコース運営に携わる母語話者教師に限定されたものであったが、日本語学習者の求めに「応じる主体

性」さえ具備できておらず、また、拘束性に対して無自覚とされがちな、特に海外の非母語話者新人日本語教師の成長をどのように捉えるのかなども、今後の大きな課題となると思われる。

以上、さらに考察されるべき今後の課題は残されてはいるが、本論文は、優れた学術研究として高く評価することができる。よって、本論文をもって日本語教育学の博士學位論文に値するものと判断できる。